

四国カルストと大野ヶ原

大西清見

<日程> (マイカーにて) 7月21日(金) 高石-阪神高速・神戸淡路鳴門自動車道・高松自動車道・松山自動車道 IC-R33.494-久万高原町-四国カルスト・女鶴平(泊)/22日(土) 女鶴平-星ふるビレッジ 9:30-10:10 天狗の森-12:45 星ふるビレッジ-天狗高原-女鶴平/23日(日) 女鶴平-大野ヶ原-久万高原町-帰阪

7月21日~23日、四国カルストに行ってきました。四国カルストは四国で一番好きな山域で、今回も四国山地へのロケーション抜群の女鶴平(めづるたいら)にテントで二泊しました。登山としてはもの足りませんが、他のカルストではあまり見られない、標高1400m級の高原の牧歌的なカルスト地形の美しい風景が待っていました。四国カルストは、愛媛県と高知県の県境に位置する、標高1,000m~1,450mの石灰岩の高原地帯です。日本の三大カルストの一つで(他に山口県・秋吉台、福岡県・平尾台がある)、東側より天狗高原・五段高原・姫鶴平・大野ヶ原からなります。一帯は愛媛県・高知県から県立自然高原に指定され、溶食作用で誕生したドリーネ(小凹地)やカレンフェルト(石灰岩の岩柱が林立している地形)などのカルスト地形が広がっています。四国カルストではカレンフェルトとともに林立するハンカイソウの群生が美しい風景を作っていました。そのカルストの中に隠れるようにヒメユリが咲いていました。ヒメユリは愛媛県の友人から絶滅危惧種と教えられていたので美しいヒメユリに出会えてよかったです。そこで浮かんだのが次の一句でした。「カルストに朱なる姫百合人を待つ」。

四国カルストで一番好きな場所は四国カルスト西端の大野ヶ原、その大野ヶ原のことを少し書いてみたいと思います。

大野ヶ原へは姫鶴平から車で約20分。大野ヶ原へ訪れる人は比較的少なく、標高1,100mを越える高原と酪農を主体とした静かな農業集落の風景に引き付けられます。年平均気温も10℃前後とか、アンデス山地の高山気候と同じ気温で年間を通して過ごしやすいように思われます。大野ヶ原には全体がカルスト地形、広大な面積に起伏の緩やかな大草原が広がっていました。最高点は標高1,403mの源氏ヶ駄場、小松地区の駐車場から直登して約30分で頂上に立てます。源氏ヶ駄場という地名が気になり調べると、「源平の戦いに敗れた平家の残党が、白い石灰岩の白馬と見誤り、退去した」という伝説に由来ということがわかりました。その石灰岩の乱立から伝説の由来を考えるのも納得ができて楽しいものです。頂上からは四国山地も一望でき、また眼下の大野ヶ原一帯にはカレンフェルトやすり鉢状ドリーネなどが見られ、なだらかな斜面は牧草地や畑、宅地として利用されていることが分かります。ヨーロッパの農村に似たいつまでも眺めたい牧歌的な風景でした。帰阪して気が付いたのですが、大野ヶ原の東側の集落一帯は、カルスト地形の最大の窪地・ポリエ(地理では溶食盆地という)ではないか、と考えました。車で大野ヶ原を通過するとき、広い盆地状のなかにある集落郡の空間から何となく確信したのです。

ところで「西日本の石灰岩分布図」を見ると、四国カルストと他のカルストの分布にずいぶん違いがあることに気が付いたのです。石灰岩の分布域は中央構造線の南側に沿うように2列に存在しており、そのなかに四国カルストや牧野富太郎(植物学者)の出身地・高知県佐川町のナウマンカルストあり、中央構

造線と1,000mの高原に位置する四国の石灰岩地域の関係などを調べてみたくなりました。
。新しい四国カルストの世界、これからも四国カルストへの地学の旅が楽しみになりました。



カルストにハンカイソウが群れる



姫百合もひそかに人を待ってくれました